

10/14 (木)

2010年(平成22年)

新潟日報

夕刊

発行所 新潟日報社
本社 〒950-1189 新潟市西区善久772-2

題字 會津 八一

第24376号

私の活動拠点は湯沢町。東京から新幹線で最短70分、自動車でも関越道のインターチェンジがあり、練馬から180キロ程度しかありません。

ゲストは関東エリアの人が多いのですが、みなさん口をそろえるのは、イメージしていたより近いということ。もっと遠く感じるようですね。この町は面積の約90%を山林が占め、四季それぞれの豊かな表情を見せ、自然を感じさせてくれます。



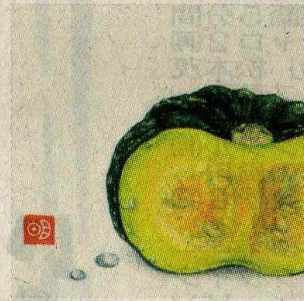
冬の障がい者スキースクールから始まったこの町での私の活動ですが、現在グリーンシーズンに提供しているプログラムを構築するとき、特に意識したのがこの自然をゲストに満喫してもらおうということ。北海道や白馬、上高地などと比較すると、山々の景観や雄大さは正直言うところ劣ります。私の拠点周辺の道路はすべて舗装され、車が頻繁に行き交います。でも0か1かのデジタルな世界と、コンクリートに囲まれた生活を送る都会の人たちにとっては、十分すぎるほどの自然がしっかりと残っているのです。

しかも、手を伸ばせば容易に触れることができる距離にある。これは他地域

資源を生かす

にはありません。舗装された道路は、シニア層やアダプティブ(障がい者)にとっては、かえって移動を楽にしてくれません。

忙しい現代人にとっては新幹線でも車でも簡単に短時間でアクセスできる町です。本格的な山ではないことは、これからアウトドアに挑戦しようとする人や、体力に自信のない人、小さな子供がいる家族にとって、ハードルが低くて体験し



やすいフィールドなのです。

地元の方々から、ときどき「湯沢はなにもない」という声も聞きます。「灯台下暗し」とはまさにこのこと。新たな大きな投資ではなく、すでにあるものを外からの視点でもう一度見ることで、皆さんの資源が見えてきます。

資源を見るために必要なこと、それは「よそ者視点」。私は、これからまずとその視点を失わないようにしないと一と考えるのです。